

平成19年度研究報告書

研究代表者

島根難病研究所 老年医学研究部門

所属 島根大学医学部眼科学講座

氏名 大平明弘

1. 研究テーマ

緑内障患者に対する検査と治療に関する研究

加齢に伴う黄斑変化に対する研究

2. 研究者氏名

大平明弘, 谷戸正樹, 松岡陽太郎¹

3. 研究概要

(目的)

正常眼圧緑内障患者の早期診断法の確立

加齢に伴う黄斑変化に対する研究

(対象)

平成19年度に受診した、総計1882名を対象にした。内訳は男性1195名、女性690名だった。平均年齢 \pm 標準偏差は、 50.2 ± 9.5 歳だった。

(方法) 眼底写真、視野計を用いて、ドックおよび眼科受診患者の解析を行った。

(結果)

表1に1882名中のうち、視神経乳頭陥凹と黄斑に異常を認めた有所見者を示す。視神経乳頭の解析では視神経乳頭陥凹の拡大が257名に認められた。また96名に視神経乳頭陥凹の異常を認めた。これは5.1%に相当した。両方の所見を合わせると352名に異常を認めた。

黄斑部の変化については黄斑上膜の形成が見られたのは29名だった。黄斑変性は9名だった。

¹島根大学医学部眼科学講座

表 1 有所見者の内訳

		乳頭拡大	乳頭異常	黄斑変性疑い	黄斑上膜
20-29 歳					
男	17	1			
女	11	0			
30-39 歳					
男	135	11	4	0	1
女	80	6	6	1	0
40-49 歳					
男	430	46	24	4	4
女	230	28	15		
50-59 歳					
男	439	61	20	2	11
女	231	31	14		5
60-69 歳					
男	150	30	5		
女	119	18	3	1	8
70 歳以上					
男	23	19	5	1	
女	17	6			
計	1882	257	96	9	29

受信者 1882 名中の有所見者を示す。加齢に伴い有所見者は著明に増加する。

この他の所見では黄斑円孔が1名だった。近視に伴う変化として、網膜変性巣が4名、脈絡膜萎縮が1名だった。糖尿病に伴う変化として、網膜出血が17名、網膜白斑が10名、明らかな糖尿病網膜症が2名だった。網膜血管走行異常は2名、網膜静脈分枝閉塞症は2名、網膜動脈硬化が28名だった。視神経萎縮が1名、白内障が3名、硝子体融解症が2名だった。

20歳代で異常が認められたのは28名中、視神経乳頭陥凹の拡大を認めた男性1名のみだった。30歳代では乳頭陥凹拡大が男性で11名、女性で6名だった。乳頭陥凹異常は男性で4名、女性で6名だった。図1に視神経乳頭陥凹拡大の各年代ごとの頻度を示す。40歳以上では10%以上に異常を認めた。

黄斑上膜は受信者1882名中、29名にみられた。また黄斑変性所見を有する者が9名にみられた（表1）。各年代ごとに黄斑上膜と黄斑変性の頻度を示す。（図2,3）。

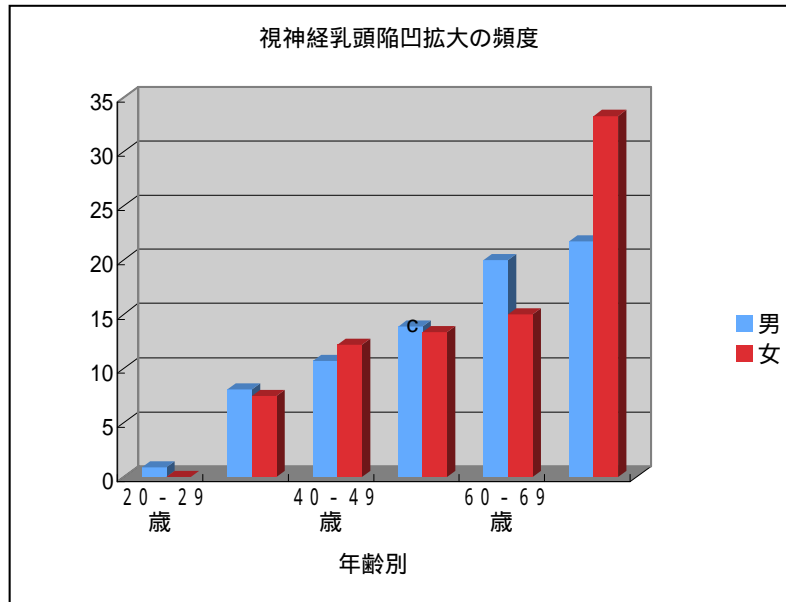


図1 各年代別の視神経乳頭陥凹拡大の頻度
40歳代以上では10%以上に異常を認める。

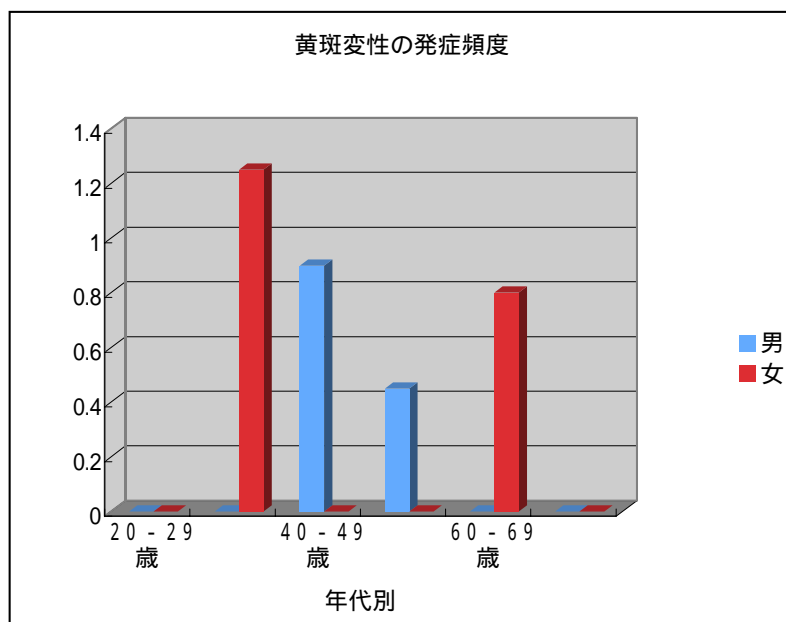


図2 黄斑変性の発症頻度
40歳代の男性で0.9%に有所見者がみられる。30代女性に1名認めた。

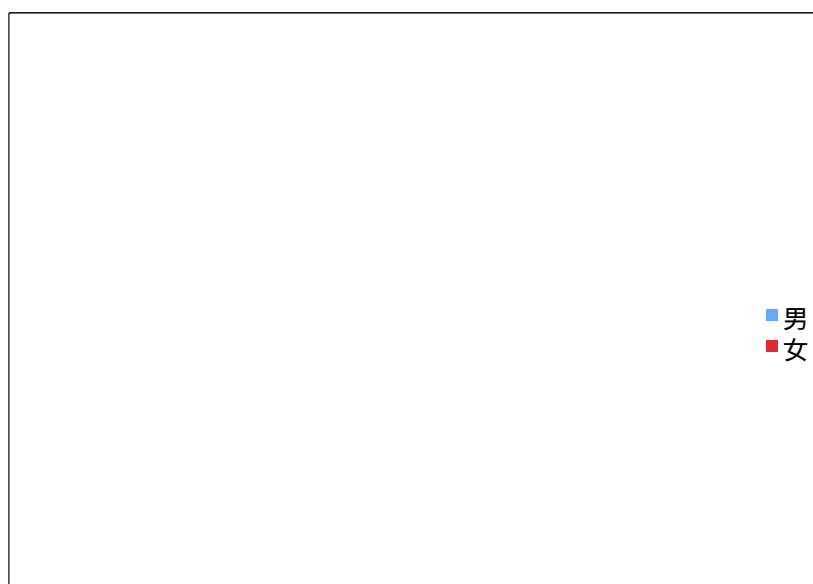


図3 黄斑上膜の発症頻度

60歳代女性で6.7%にみられた。

(考察)

受信者 1882 名のうち、視神経乳頭の拡大が257名に認められた。これは 13.7%に緑内障の可能性を示した。同じく1882名中、96名に乳頭陥凹の異常を認めた。これは 5.1%に緑内障予備群の存在を意味する。緑内障疑いが1882名中353名、18.8%に及んだ。黄斑変性は総数としても少なく、40歳代以下にみられた変性はいわゆる、加齢黄斑変性とは考えられず、他の疾患を考慮すべきであった。また今回の調査では糖尿病の頻度は低かった。対象者に偏りがあつたことが推測される。

(結語)

平成 19 年度、島根難病研究所を受診した 1882 名について、正常眼圧緑内障患者の早期診断法の確立と加齢に伴う黄斑変化を発見することを目的に眼底写真と視野検査により解析した。その結果、視神経乳頭の異常陥凹を 96 名に認め、5.1%に及んだ。黄斑上膜は 29 名で、60 歳代女性に 6.7%認められた。糖尿病、黄斑変性の頻度は低かった。視神経乳頭の解析は緑内障早期の発見に重要であることが確認された。黄斑上膜の発見には歪視の早期発見が重要と考えられる。